

氏名（本籍）	エン 遠	ドウ 藤	キヌ 衣	ホ 穂（東京都）
学位の種類	博士（音楽学）			
学位記番号	博音第55号			
学位授与年月日	平成15年3月25日			
学位論文等題目	論文 北イタリアの写本伝承による15世紀初期の組ミサとミサ・サイクル - 歴史的再評価のための試論 -			
論文等審査委員				
（論文審査主査）	東京芸術大学	助教授	（音楽学部）	土田英三郎
（論文副査）	”	教授	（ ” ）	船山隆
（ ” ）	”	”	（ ” ）	廣野嗣雄
（ ” ）	”	”	（ ” ）	川井學
（ ” ）	”	助教授	（ ” ）	片山千佳子
（ ” ）	”	”	（ ” ）	大角欣矢
（ ” ）	東京芸術大学名誉教授、愛知県立芸術大学・香川大学非常勤講師			角倉一朗
（ ” ）	国際基督教大学	教授		金澤正剛

（論文内容の要旨）

本論文は、北イタリアの写本に伝承された15世紀初期の組ミサとミサ・サイクルを対象とし、様式分析と写本における伝承状況の考証を通じて、初期多声ミサ曲史におけるその歴史的意義を再評価しようと試みるものである。

ローマ・カトリック教会の典礼で歌われた多声ミサ曲の5つの通常文楽章は、元来、楽章別に分類した形で写本に収められていた。しかし15世紀初期になると、グロリアとクレド、またはサンクトゥスとアニュス・デイを対にして筆写した「組ミサ」や、キリエからアニュス・デイまでをひとまとめに連続して筆写した「ミサ・サイクル」が写本に登場するようになる。先行研究では、組ミサやミサ・サイクルを構成する諸楽章が、いかなる音楽素材により統一されているかを明らかにすることに主眼が置かれてきた。一方、音楽素材によるまとまりをもたない組ミサやミサ・サイクルも写本に収められていたが、研究の主要対象として取り上げられることはなかった。なぜなら、このような作品は写本の編纂過程で偶発的に生まれたものであるか、写本の編纂者が互いに無関係な楽曲を組み合わせて組ミサやミサ・サイクルに作り上げたものであると解釈されてきたためである。しかし、現存する15世紀初期の写本には、音楽的なまとまりのない組ミサやミサ・サイクルが少なからず筆写されている。これらの作品を含めたより包括的な視野から初期多声ミサ曲の全体像を捉え直すことが本論文の目的である。

15世紀初期多声ミサ曲の主要伝承写本であるQ15写本Bologna, Civico Museo Bibliografico Musicale, MS Q15 (olim 37)には、グロリア - クレドの組ミサ35曲とミサ・サイクル8曲が収

められている。本論文では、これらの作品の構成原理を解明し、Q15写本における筆写状況を他の伝承写本と比較校合することにより、この時期の多声ミサ曲の創作と演奏の実態を明らかにすることを試みた。

第1章では、15世紀初期の多声ミサ曲の歴史的な位置付けに関する従来の認識と先行研究の論点をまとめ、問題の所在を明らかにした。その上で、Q15写本に伝承された作品の中でも特に重要な問題を投げかけているいくつかの組ミサの事例を第2章で、ミサ・サイクルの事例を第3章で取り上げ、詳細な様式分析と伝承写本における筆写状況の比較検証を行った。音楽的なまとまりのないグロリアとクレドを対にして組ミサやミサ・サイクルを作るやり方は、15世紀初期における正統なミサ作曲法のひとつであったと考えられる。これらの作品には、テキストの意味内容や人称の異なるグロリアとクレドの個性を尊重する、伝統的なミサ作曲様式が継承されている。サンクトゥスとアニウス・デイの対には、それが組ミサであれミサ・サイクルの一部であれ、何らかの音楽的類似性が確認される場合が多い。そもそも、サンクトゥスの聖歌とアニウス・デイの聖歌には、互いに類似した旋律をもつものが少なくない。多声によるサンクトゥス・アニウス・デイの対にみられる音楽的類似性は、単旋律聖歌の伝統に深く根ざしたものであると考えられる。15世紀初期のミサ・サイクルは、音楽的関連性のないグロリア・クレドの対と音楽的類似性のあるサンクトゥス・アニウス・デイの対で構成されていることが多いが、それは中世以来のミサ作曲様式と単旋律聖歌の伝統が15世紀初期にも依然として継承されていたからに他ならない。その一方、グロリア・クレドの対にも音楽的なまとまりをもたらそうとする新たな潮流が生まれつつあった。初期の段階では、楽曲構造（段落区分の細かさ、メンスーラ構成、Amenの書法等）を楽章間で類似させることに興味注がれていたが、やがて共通の音楽素材を両楽章に用いる手法が開拓されていく。

第4章では、Q15写本と多くのレパートリーを共有するアオスタ写本Aosta, Biblioteca del seminario Maggiore, Cod. 15 (*olim* A¹ D19)における筆写状況を比較し、このジャンルの形成と写本における伝承過程との相関関係について論じた。両写本における作品の伝承状況等の比較から、作曲家のみならず演奏者や写譜者までもが組ミサやミサ・サイクルの創作に深く関与していたことが確認された。第5章では15世紀初期における組ミサとミサ・サイクルの諸相をまとめ、15世紀初期における「組ミサ」と「ミサ・サイクル」が多角的な概念を内包していたことを指摘した。すなわち、「作曲」された組ミサやミサ・サイクルだけでなく、演奏者や写譜者により「編纂」された組ミサやミサ・サイクルもまた、初期多声ミサ曲の重要な実践形態のひとつであったと考えられる。さらに、この時期の多声ミサ曲における冒頭動機、テノル声部の様式、定旋律の用法の中に、後の循環ミサ曲の形態を生む下地となったと思われる重要な要素が観察されることを指摘した。

15世紀初期の北イタリアの写本には、中世の伝統が堅固に継承されながらも、楽章間を音楽的にまとめあげようとする新たな動きが導入されつつあった時代の様相が、生き生きと映し出されている。このような視座に立って初期多声ミサ曲の全貌を捉え直すことにより、従来、ミサ曲史における「不毛の時代」とみなされてきた15世紀初期という時代が、実は多様性を孕んだ重要な歴史の転換期に位置していたと評価するに至った。